

遠州横須賀の祭りにおける祢里の歴史と人びとの意識

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-01-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大内, 佳樹 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/9960

遠州横須賀の祭りにおける祢里の歴史と人びとの意識

大内佳樹

- 1 はじめに
- 2 祭りの歴史と祢里
 - 2.1 三熊野神社大祭
 - 2.2 横須賀の祢里
- 3 各字町の人びとにとっての祭り
 - 3.1 「おらんちょう根性」の強い字町の人びと
 - 3.2 十六軒町
- 4 おわりに

1 はじめに

本稿では、現代の人びとのどのような意識から祭りが存続されているのか。人びとにとって祭りとは如何なるものかを問う。

今日、祭りは衰退の方向に向かっているものも多い。特に少子高齢化が進んでいる状況の中、特に地方で祭りを存続させることは、人手不足や資金不足といった問題がつきまとう。

祭りの意義はまず一つに町内の横の繋がりの保持がある。深澤あかねは「商業町における祭りの変遷」の中で、「山車の制作運行とは、元来、個々の商店の集まりでしかなかった商店街に、繋がりの契機を育む活動の一環として存在した」としてさらに「人々は祭りをよこのつながりの最後の砦とみなし、毎年の山車運行を続けているのではないか」と言っている（深澤 1991: 95）。実際に祭りの組織や階級が、そのまま町の運営に関連している。

その中で、横須賀の三熊野神社大祭は 3 日に及ぶ祭りであり、地元の人だけでなく外部からの人も集まる大規模な祭りとなっている。私が実際にその祭りを見に行って一番印象的だったのは祢里（ねり）であった。ここでいう祢里とは、祭りの際に使われている二輪屋台のことである。13 町の字町ごとに出されている祢里は形や装飾の違いでとても特徴的であった。祢里について話を聞くと、人びとが祢里に対してそれぞれの感情をもっていた。遠州横須賀では、「自分たちの町が一番だ」と自慢しあうことがよくあり、それを「おらんちょう根性」という。人手不足などの問題から祢里の運営が困難になっている町もあり、町によって人によって祢里に対して多様な考えがあった。

私は三熊野神社大祭が毎年行われているのは人びとのアイデンティティに関係している

のだと考える。松島らは、アイデンティティは地域の維持・発展に欠かせない重要な資源であるとし、さらに地域を構成し維持する要素として、地域を見分けるための経済・文化・ガバナンスといった象徴的な形象を挙げている。さらにアイデンティティを高めるためには、他人によるアイデンティティの承認と外集団を介したうち集団の評価を高くすることが必要であるとしている（松島ら 2012: 499,501）。

私は横須賀の人びとは「祭り」、特に「祢里」を象徴的な形象とし、さらに祢里を通して他人から承認されてアイデンティティを高めていると考える。つまり祢里が横須賀の人びとのアイデンティティの形成、向上に大きくかかわっているのだ。本章では祢里に対しての意識を通して人びとの祭りに対しての意識を見ていき、今日まで横須賀に祭り文化が続いているわけを見ていく。

2 祭りの歴史と祢里

本節では横須賀で開催される三熊野神社大祭の衰退と再興の歴史、さらに祭りで使われる「祢里」と呼ばれる山車を紹介する。

2.1 三熊野神社大祭の現状

三熊野神社大祭は4月の第一金曜、土曜、日曜の3日間に横須賀で行われている山車祭りである。この祭りは江戸時代の元禄年間には踊りを主体としたものであったという。

鈴木武史氏（男性、50代）によると、戦後間もないころ、喧嘩などの問題が頻繁に起こる理由から警察に祢里の曳き回しの禁止や厳しい時間制限が課せられ、祭り本来のやり方ができない時期があったという。そのため、千秋楽という祭りのフィナーレを十数年間実施できなかった。祭りの開催日も固定日から週末に変更された。町の人の意見を聞くアンケートを実施しても、祭りをやめたほうがいいとする意見が多かった。実際に祭りを2年に1回の実施にする案さえ出ていた。

そのような時代の中で、鈴木氏は小学4年生の時から千秋楽のできる祭りをやりたいと考えていた。鈴木氏は、高校中退後、1980（昭和55）年、総代会という各字町の代表の集会上に13町の若い衆の集まり（のちの幹事会）を設けてもらい、そこで祢里祭りの再開を呼び掛けた。まず、警察の言う通りに祭りの始まりから終わりの時間を守ること。そこから祭りでの不祥事を警察ではなく、責任者にまず連絡するなどして、自分らで管理するシステムをとることにより、警察の理解を得て、開催時間の延長や奉納祭の復活につながった。

祭りが復活すると、観光客などに親しみやすいものにする運動が進められようとしていた。その中で、祢里を1台増やして観光客に曳かせる、テレビ局の都合のつく時間に祭りの実施時間を合わせるといった案が出た。祭りを外の人たちにアピールするために祭り本来の形を崩して、観光客にとって都合がよく、合理的なものにしようとしたのだ。祭りの保守派はこれに対して猛反対し、結局実現されなかった。鈴木氏は保守派であり、祭

りを観光客にとって都合のいいものにするということに反対だった、という。そもそも観光客が増えることで、祭りの維持が逆に困難になり得る。自分たちが変に観光客に媚びを売るのでなく、自分たちらしい横須賀らしい祭りを開くことで、その素晴らしさのわかる人に集まってもらい一緒に祭りを楽しんでもらえればいい、という考えを鈴木氏は持っていた。

このように、三熊野神社大祭は一度廃れかけたものの、そのやり方を戦後からほとんどかえることなく維持しており、その点できわめて歴史的な祭りであるといえる。

2.2 横須賀の祢里

横須賀の祢里は2つの源氏車の上に曳き棒のついた上座を乗せ、その中心に1本の柱を立てて、これに花差し、万度、鍋蓋を差し込み、さらに鍋蓋の上に「山車」と呼ばれる人形を取り付けている（写真1）。このような祢里の形態を「一本柱万度型」といい、これとほぼ同一なものを江戸中期の天下祭を描いた「神田明神祭礼絵巻」の中に見ることができる。そのため遠州横須賀の祢里は江戸天下祭の流れを汲んでいるといわれている。

江戸天下祭りの山車は周辺地域に売却され、また戦争により焼失したため、残っていなかった。その中で横須賀の祢里はその姿かたちをほとんど変えることなく残っており、「山車文化の生きた化石」と称される程だった。このことが全国山車祭りで紹介されると、一気に全国からの祭り関係者から注目を浴び評判となった。そこから東京の神田祭に「里帰り」という名目で祢里を持ち出し、曳くに至った。

横須賀の祢里は歴史的価値がとても高く、町の外の人からも素晴らしいものと評価されている。また神田祭でも曳いたことにより、「横須賀といえば祢里」という風に象徴的なものになっている。これは、祢里のことを町の人びとに聞いた際に必ずと言っていいほど挙げられた話題であった。祢里の存在が全国的に認められたことにより、人びとには横須賀に対する強い自負の意識やアイデンティティ感覚がもたらされたと考えられる。



写真 1 祢里（田中撮影）

3 各字町の人びとにとっての祭り

調査をする中で、祭りをめぐって字町ごとに人びとの意識の違いがみられた。ここでは、その違いが何なのか、意識の差を埋めているものは何なのかを見ていく。

3.1 「おらんちょう根性」の強い字町の人びと

新屋町は三熊野神社から見て東南に位置している字町である。軒数は 38 軒であり、13 町の中では平均的な軒数を持っている。

新屋町で「わたや」という店を営んでいる竹内誠人氏（男性、60 代）に祢里について話を聞いた。新屋町の祢里の自慢として、まず鍋蓋が挙げられた。他の町の鍋蓋は六角形のものが多いが、自分の町の鍋蓋は円形になっている。また、その鍋蓋の彫刻は一本の木から彫られた龍が巻き付くように彫られており、飛び出すような迫力があって鍋蓋の彫刻は他の町より素晴らしく自慢できると語っていた。また、新屋町の神功皇后の出し人形も 13 町の中で 1、2 番を争う出来の良さであると自慢していた。

今の祢里は元の寸法通りに作っているため、新調するたびに大きくなる他の町の祢里と比べてやや小ぶりである。源氏車のごこう部分が長いと「粹」にみえる。また漆塗りが黒に近いこげ茶であり、最初はどうかと思ったが、実際に祢里全体を組み立ててみると、非常に合っていた。そのため「黒祢里」という呼称もあり、新屋町の祢里を特徴づける要素となっている。

1928（昭和 3）年に祢里の上部分が完成して、それに合わせるように下台も新調しようとする計画が進められていた。支那事変により計画は無しになり、のちに残念な話として新屋町に残っていた。その話が語り続けられてきた中、当時の心意気を受け継ぎ、1995（平

成 7) 年に新しい祢里も完成した。しかし、3 年後の大祭の日に焼失した。このとき町の人びとは、保存してあった先代の祢里を出すことによって祭りになんとか参加したという。祢里が焼失したのが誰の責任かというような犯人探しがされたのではなく、いかにして祭りに参加しようかと行動したことに新屋町の気質を感じたと竹内氏は語っていた。

また新しい彫刻のデザインは自分たちのアイディアとここの祭り文化をよく理解してくれた職人との間で生まれたものであると語っている。職人との心が通って初めてできたもので、そういう意味でかけがえのないものとなっている。

竹内氏は自分たちの祢里の特徴やデザイン、また新屋町のエピソードをも踏まえて、誇りについて語っており、まさしく「おらんちょう根性」を強く感じた。

次に河原町の祢里について述べる。河原町出身の鶴見憲章氏（男性、40 代）に自分たちの町の祢里についての自慢について話を聞いた。

河原町の祢里の特徴は、屋台自体が箱型になっており、源氏車の半分を覆っている。そのため骨組みがでておらず、他の町より重くなっている。このような構造の祢里は河原町のみにもみられるものであるため、自分たちの町でない人びとも河原町の祢里がどのようなものか認識を持っている。さらに彫刻枠には貝殻の装飾が散りばめられており、他の町のものよりきらびやかになっている。

松本功樹氏（男性、30 代）も自分たちの祢里についてのエピソードを話した。新しい天幕を復刻新調した時に、古いものは保存しようという案もあったが、使い果たすために祭りが雨の時には古いものを使うことにしているという。そこには古い天幕にたいしてガラスケースの中で保存するよりも、最後まで祭りの道具としての役目を果たさせてあげようという愛着からの理由があるという。また河原町の古い天幕は他町のものより年季が入っており、色あせてオレンジ色になっていた。そのため他の町よりも天幕の色が異なっているという意識が物心ついた時からあった。そのような点から、個人的に祢里自体よりも天幕に愛着があると松本氏はいう。

鶴見氏、松本氏の話からは、主に河原町の祢里が唯一の珍しい形態をしていること、人びとが天幕へ愛着を特に持っていることがわかった。

次に東本町の祢里について記述する。東本町の清水時計店を営んでいる清水武氏（男性、60 代）に話を聞いた。まず自分たちの町の祢里の自慢について、だし人形にこだわりを持っているという。東本町のだし人形は司馬文公という北宋代の人物の神童伝説をもとに人形を作っている。他の町のだし人形は武者人形などが多く、知恵もの、君子を司った人形であること。また、このだし人形を撮影されてよく取り上げられることが多く、自慢できると清水氏は語っていた。このだし人形は司馬文公とその友達 2 人の合計 3 人で構成されている。他の町のは 2 人で構成されているものもあるが、個人的に 3 人のもののほうが、バランスがよく、空間をつかえているため立体的に見えて立派だと清水氏は語っていた。

また、万度には、「人積」「陰徳」「必有」「陽報」の文字が書かれている。これらの言葉

は、「人は常に隠れた徳を積み、すぐに報われなくともいつか必ず報われる」を意味する。この言葉とその意味は東本町の全員が知っており、一種の座右の銘のようなものとなっている。

これらのだし人形と万度には物語的に関連性がある。だし人形と彫りと祢里に一貫性がある点で自分の町の祢里の好きな理由にもなっているという。

清水氏も自分の町の祢里についての装飾を、資料を出し、それを見ながら語ってくれた。今の祢里は3代目であり、以前の祢里には彫りがなかった。それを補うように金具に凝っていて、その数は336枚にもなっている。そして3代目を作るときに松林洋氏（男性）が彫刻を施して、今の形となっている。そのため、金具にも彫刻にも自身のある祢里だというふうに語ってくれた。

天幕は他の町のものよりも色あせず、濃い赤色となっている。刺繍も立派なものでとても厚い。他の町は太鼓を叩くとき、天幕を邪魔にならないようにたくし上げるが、東本町ではそれを禁止しているという。自慢の天幕にしわがつかないように、また長持ちさせるための工夫だという。また祢里の装飾だけでなく、人びとが祢里を曳くときにつかむ「杵」が長く作られており、曳きやすい形になっているという。祢里について、飾りなどの見た目だけでなく、実用性という点からも、自分たちの祢里が「杵」であるという。

また、祭りの際、出のお神酒という伝統的な儀式や、衣装付けをきっちり毎回続けている点も東本町の誇りであるという。

3.2 十六軒町

次に十六軒町について述べる。柳瀬孝氏（男性、40代）と山中酒造を営む山中久典氏（男性、44歳）に話を聞いた。十六軒町は22軒で13町の中で一番軒数が少ない。軒数が少ないことで「十六軒町」という名前になった、という説があり、昔から軒数の少ない町であったと推測できる。軒数が少ない町であるため、数年に一度というように祭りの当番が頻繁に回ってくるなど、小さな字町だからこそ苦労、負担があるといえる。また、金銭面的にも一人当たりの負担は他の町より大きいという。そんな中、祢里の曳き手のほとんどは実際に十六軒町に住んでいる人ではなく、外部から来た「助っ人」で占められている。十六軒町在住の曳き手は今や3人ほどであり、他の町と比べてとても少ない。助っ人に対して、人数が多い町では逆に「曳かせてあげる」という感覚であるのに対し、「曳きに来てもらっている」という感覚が強いという。助っ人は、他の町より早い段階（40年ほど前）から利用しており、他の地域の祭り関係者には毎年、はがきを送り、酒の付き合いになることで祭りに助っ人が来てもらう努力をしているという。

祢里についての誇り、自慢についても聞いてみた。すると、祢里について詳しくないとのことだった。他の町で見られた自慢するという「おらんちょう根性」はあまり見られなかった。

しかし、祭りに十六軒町が祢里を出すことについて、人数が厳しいということで出さな

かったことはないし、きっとこれからも出し続けていくだろうと語っていた。確かに人数が少なく、祢里の運営なども厳しいが、祭りで十六軒町が祢里を出さないという考えに至ったことは一度もないという。ずっと祢里を出し続けるからこそ、十数年前に祢里を新調したし、祭りは13町が揃って祢里を出さなければ成立しない祭典であるという感覚があるという。他の町より早い時間から準備するなど工夫をしているし、一人ひとりが多くの仕事ができることが求められている。このように人数の少ない町だからこそ、個人の祢里を出すための知識が必要となり、団結しなければならない。祭りの準備は負担が大きく、面倒だと感じないかと聞いてみると、そんなことは全くないと答えた。自分たちの町の自然な流れであるため、その作業は体に染みついているし、むしろ準備さえ楽しいと感じると語ってくれた。

十六軒町には他の町と比べて自分の町を自慢するという「おらんちょう根性」の主張はなかった。しかし、祢里を出すことは当然のことであるという意識があった。そこには祢里を出すための工夫や努力がみられ、他の町よりも負担が大きく大変だと私は感じた。しかし、その工夫や努力があつてこそ祭りに祢里を出すことに他の町に比べて大きな意義を持っていた。

4 おわりに

本稿では、戦後から今に至る経緯と人びとの祭りに対する意識を合わせて、祭りが今も存続している訳を分析してきた。遠州横須賀では祭りの合理化は人手不足の解消のための最低限度のものしかされなかった。集客目的の活動は少なく、自分たちが祭りに参加することに意義を感じていた。受け継がれてきた伝統を存続させることによって、その歴史的価値を下げることなく、今まで祭りを残すことができていたのである。

祭りの存続を支え、また補強しているのが人びとの祢里に対する誇りだろう。祢里は、外の人びとに対しても祢里の歴史的価値から、象徴的なものとなっている。また横須賀の人にとって生まれたころから使われ続けているものもある。多くの人びとが自分たちの町の祢里について詳細に知っていた。そこから自分たちの祢里が一番だとする「おらんちょう根性」が色濃く見られた。しかし、横須賀の誇りは他の町と比べ合い、高め合う「おらんちょう根性」だけで構成されているわけではなかった。人手不足が顕著な字町では祭りに祢里を出し続けていること自体に誇りを感じていた。このように祭りに対しての状況が字町ごとで様々であり、一概に横須賀の人びとは「おらんちょう根性」を持っているとはいえなかった。

三熊野神社大祭が毎年開催されているのは、祭りが他の地域と区別できる象徴的な形象であることを人びとが認知し、それが横須賀に暮らす人びとのアイデンティティを支えるものとして認識しているからだろう。しかし、「おらんちょう根性」のあり方に見えるように、祭りを支える情熱や意識のあり方は多様である。三熊野神社大祭は、横須賀に暮らす

人びとの多様な意見や思いをひとまとめにし、包摂するイベントであるとともに、それを外からやってきた人びとに可視化する機会であるといえるだろう。以上の点から、三熊野神社大祭は横須賀に暮らす人びとをつなぎとめるだけでなく、地域の内外に自分たちをアピールできるものとして、地域の人びとに活力を与えているといえる。

参考文献

深澤あかね

- 1991 「商業町における祭りの変遷～祭りの背後にある商業経営と生活に着目して～」
『社会学年報』40: 87-97。

松島格也・小林潔司・鄭蝦榮

- 2012 「アイデンティティと過疎中間地域におけるおつきあい行動—日南町を事例に—」
『土木学会論文集 D3 (土木計画学)』68(5)(土木計画学研究・論文集第 29 卷)499-511。